

はじめに

新中国建設後、文化大革命終了までは知識人冷遇・敵視政策もあり、中国の大学は低迷していた。文革終了後、とりわけ改革開放政策が進展し経済が急激に拡大するに従い、中国の大学も発展している。今や、中国国内の大学の学生数は世界最大であり、世界の有名大学や大学院などには中国の大学の卒業生や在学生在が多数留学している。また、優秀な在外科学者・研究者を呼び戻し教員に迎えることにより、中国の大学の科学技術レベルは格段に向上している。

しかし日本では、一部の関係者を除いて中国の大学の実情を知る人は少ない。その一部の関係者も、自分が関係している大学を誇りたいあまり、実態以上にその大学を過大評価している例が見られる。また中国の大学は、国家とともに発展してきた歴史があるため、政府との関係が非常に強い。特に、新中国建設後は中国共産党の一党支配ということもあり、政府や共産党へどれほど有為な人材を供給したか、それら人材がどれほど高い地位に就いたかといった観点から、その大学の力を測ろうとする傾向がある。著者の属する科学技術振興機構研究開発戦略センターは、主要国の科学技術の実情を調査分析することが主眼であるので、以上のような観点を少し離れて、主として研究開発能力、研究人材育成能力などの科学技術力を中心に中国のトップ大学の実力を紹介しようとしたのが本書である。

中国の大学の総数は、すでに日本をはるかに凌駕し、世界の米国に迫る勢いである。したがって、科学技術力という観点から見て世界的なレベルにある大学もあれば、そうではない大学も多い。本書では、トップ大学の科学技術力を把握する観点から、数多くの中国の大学の中で最高学府といわれている北京大学と清華大学に絞った。

本書の構成であるが、北京、清華両大学の歴史、現況、そこで学ぶ学生の日常生活、教員インタビューで把握した両大学の優れた点と課題を記述した。その上で、欧米のトップ大学や日本の東京大学との比較を行い、両大学の科学技術力の現状を分析した。

外形的な指標で現状を見ると、両大学はすでに欧米のトップ大学や日本の東京大学と遜色ない状況にある。また科学論文での比較調査で見ると、清華大学の工学系の強さは特筆すべきものがあり、世界トップレベルの MIT（マサチューセッツ工科大学）などと比肩している状況に近づいている。ただ全般的な科学技術力については、両大学ともハーバード大学、MIT、ケンブリッジ大学などの欧米トップ大学とはかなりの距離があり、東京大学にも後塵を拝している。しかし、両大学の持つエネルギーと勢いは圧倒的であり、近い将来に東京大学を追い越し、トップ大学に迫る可能性も否定できない。日本の科学技術関係者や大学関係者は、中国のトップレベルの大学の動向をしっかりと把握し、どのように競争し、かつ協力していくかを十分に考える必要がある。

本書の最後の章では、中国の大学制度、大学に関する政府機関、大学の科学技術経費、政府の科学技術部の研究費、NSFC（国家自然科学基金委員会）の研究費、大学重点化政策、大学の人材確保政策について、参考資料として記述した。適宜参照されたい。

なお、北京大学と清華大学の歴史を記述していくと、第二次世界大戦終了までに日本軍が行った負の遺産が大きく浮かび上がってくる。両大学の卒業生が中国の中心的な指導層として活躍していることを考えると、その影響は計り知れない。本書は政治的な意図を持った著作ではないので深入りしていないが、我々日本人は、中国が誇る最高学府である北京大学や清華大学に対する過去の負債をきちんと直視し、中国側と向き合っていかなければならない。

2014年8月
林 幸 秀